

# 立命電友会

## 多くの人に助けられた

### 感謝の人生

株式会社 九電工 教育センター 理事

部長 森下 明憲

(昭和四十四年卒)



熊本で試験があるので受けてみよう！  
これが立命館大学理工学部電気工学科に入学するきっかけである。幸いにして合格したものの入学決定までには紆余曲折があった。それというのも、修学旅行以外に田舎を出たことがない私が、都会でしかも一人で生活できるのかという親戚一同の心配と、その後受験した地元大学の教育学部、商学部などにも合格したからである。最後の決め手になったのは、工場の電気主任技術者をしていた祖父の

一言「電気は面白いぞ」が決定打となり、立命館大学に入学することとなった。下宿は右京区の桂離宮の近くに桂離宮があるということとは後になってわかったことであるが、休みの日などは下宿先の小生とよく遊びに行ったりしたものである。一年に一回庭園が一般公開されるとのことであったが、残念ながら一度も中には入ることはなかった。  
大学時代は学業、学生生活、下宿生活のいずれも淡々と過ごしたように思われる。

記憶にあるのは、ある教授が「立命館大学に工学部ができて二十年にしかならない。町の人から『りっちゃん』と呼ばれている。これは親しみを込めて呼ばれているかもしれないが、工学部が世間から認められていないからである。世間から認められる学部になければならない」と声高らかに話を

されたことに教授の情熱を感じたものである。その思いが今日まで引き継がれ、立命館大学理工学部を日本に冠たる学部にしたのではないかと思っている。  
昭和四十四年の卒業の年は学生運動真っ盛りで、授業の始まる前に滔々と自説を述べる学生がいた。田舎の私は、ただただ唯然とするやら感心するばかりであった。そして最後には卒論試験、卒業式も行われず、両親を卒業式に呼ぶこともなく、卒業の感激を味わうこともなく、なんとなく学生生活が終わったことは残念であった。  
私生活では、定期券を買いに四条河原町に行ったが場所がわからない。道行く人に聞いたら、売り場が道の下にあるという。道路の下に道があること自体が驚きであるのに、その規模の大きさもさすが都会だと驚くばかりであった。  
二回生になって生活費節約のため自転車通学をすることにした。西京極から西院、さらに妙心寺を通り一時間以上かかって、暑かろうが寒かろうが、雨がふっても、雪がふっても三年間通った。行きは登りできつい思いをしたが帰りは下りで楽であった。「苦あれば楽あり、人生は悪いことばかりではない」という母の話を思い出しながら通学したものである。ある日、踏み切りで一旦停止しなかったら、警備員に違反切符を切られた。田舎では考えられないことであった。

他の思い出では、ある女子大と合コンをしたことがある。誰が段取りし、何人来て、何をしたらかなど記憶は定かではないが、場所は嵐山、楽しい一日であった。  
経済的には、当時つけていた家計簿からすると、ちゃんぽん五十円、かき氷二十円など家からの仕送りのほとんどが飲食代と本、ノートなどの学用品となっていた。どちらかというと地味な生活をしてきたようであるが、兄は東京、妹は私立高校、それと私の年子三人の学費、生活費を工面した両親の苦勞は大変であったろうと思うと感謝の念に堪えない。  
卒業と同時に現在の会社に入社、電気工事部門の配属となった。入社もすんなり決まったわけではなかった。というのも、県の公務員試験に合格していたからである。さてどちらにするかという話になったとき、母の知り合いの方が「民間会社かと思う存分に仕事ができ、力を発揮できるぞ」の一言で現在の会社に決定した。同期生十七名、初任給二九、五〇〇円であった。  
入社後は、現場実習、福岡や大阪での現場代理人、宮崎や福岡での工事所長、本社設計、本社の研究開発、技術研究所長、そして現在の教育センターでの社員教育と電気工事に関する業務を一通り経験してきた。  
配属先の最初の現場では、終業時間後に先輩から「よし行くぞ」の一言があり、今からまだ仕事かと思いきや、これが角打ち(酒飲み)であった。下戸の私は大変苦労したことを忘れられないが、その先輩とは今でも親しくしていただいており、よき先輩に恵まれたと感謝している。現場では、図面作成、材料手配、施工後の確認、得意先や業者との打ち合わせと猫の手も借りたいほどの忙しさであった。更に、図面が間違っている、材料が違うと言われては怒られ、材料がないと言われては材料店ま

で取りに行ったりして忙しさに拍車をかけていた。それこそ竣工際は徹夜となることも度々で、3K(きつい、危険、汚い)そのものが建設業の代名詞みたいな時代であった。  
仕事や社員教育を通して感じることは、いつの時代にあっても人が成長するのに必要な資質は、「素直さと熱心さ」であると思われる。最近の新入社員は自分勝手だ、言われたこと以外のことはしないということに耳にすることが多いが、決してそうではない。会社や先輩がどれだけ育てる気持ちと情熱を持って接するにかかっているかと実感している。  
勤務中、様々な経験をし、多くの人との出会いとともに、研究開発勤務時から今日まで電気設備学会や照明学会などの活動を通じて大学の先生方とも懇意にしていた大きな期間となった。入社した当時は七年間となった。入社した当時はこれか四十年来も働くのかと思っていたが、すでに定年を迎えようとしている。まさに、「光陰矢のごとし」「人生は先に長く後に短し」を痛感する今日この頃である。  
私の履歴書になってしまったが、昨年、立命電友会九州・沖繩支部総会で二代目の支部長を仰せつかった。どんなに時代や社会、立場が変わっても、世の中の手助けのことが人と人との出会い、繋がりにかかっていると思われる。立命電友会九州・沖繩支部は小さな集まりかもしれないが、この集まりを大切に、少しずつでも輪を広げていければと思っている。今後とも皆様方のご協力、ご支援をお願いいたします。

# 新任のご挨拶

電子情報デザイン学科

助教 泉 知論

このたび二〇〇五年四月より、電子情報デザイン学科助教教授に着任致しました。

幼い頃から作ること／創ることが大好きで、学童雑誌の付録、料理、プラモデルからはじまって、プログラミング、電子工作、バイク、日曜大工……と、趣味といえは、何かしら頭と手を動かすことです。自然と「工学」を志すようになり、特にコンピューターに興味を持って、東京工業大学工学部情報工学科を卒業、同大学院理工学研究科電気・電子工学専攻を修了して、京都大学大学院情報学研究科通信情報システム専攻助手を経て、このたび立命館大学理工学部電子システム系にお世話になることになりました。京都大学時代から、日本初の本格的産学連携ベンチャーである株式会社シンセシスの研究員を兼業し、LSI関連の研究開発にも取り組んでいます。大学院生時代は、梶谷洋司先生（現北九州市立大学）のご指導の下、LSI設計技術（CAD、EDA）、特にレイアウト設計技術に関する研究開発に従事しました。

梶谷研では、アルゴリズムの設計、解析とツールのプログラミング、すなわち理論と実践の両方の観点から物事をとらえ、考えることの重要性を学んだように思います。京都大学では、中村行宏先生の研究室において、リコンフィギュラブル・システム（プログラミングできるハードウェア）、マルチメディア処理システムのアーキテクチャと設計、通信システムのアーキテクチャと設計、などに関する研究開発に携わり、また、職業人としてのありかたについてご指導を頂きました。シンセシスではこれらテーマにかかるプロジェクトに従事し、企業での開発現場という、大学では得難い経験をさせて頂いています。そうして、LSIを中核としたシステムの能力、可能性、その研究開発のおもしろさを強く感じるようになりました。

LSIを中心に据え、産官学連携を強力に推進する本学科は、私にとって他に得がたい環境です。みなさんと一緒に、楽しく研究開発を進めていきたいと思っています。もちろん、実際に「モノ」を作った動かし世の中で役立たせるには、おもしろさだけでなく、さまざまな困難、苦勞があります。

私の時代は、パソコンでゲームをしたければ、雑誌に掲載されているプログラムを自分で入力する、ジョイスティックが欲しければ自分で作る、という時代でした。目的の本質ではないけれどやらなければ前に進めない、そんな雑多な障害について、自ら考え、実行し、解決することが必要です。立命館の学生のみなさんに創造力と行動力を発揮していただくことを期待し、またそれを伸ばすような指導を心がけ、ともに切磋琢磨し「できた！ 動いた！」という感動をわかちあっていきたいと思っています。みなさま、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

電気電子工学科  
講師 小矢 美晴

本年四月より任期制講師として電気電子工学科に着任いたしました。私はこのBKCができる一年前に本校に入学し、以来、四年間の学部・二年間の大学院前期課程・三年間の大学院後期課程を立命館大学で過ごし、学位を取得した後、引き続き二号助手として三年間、立命館大学の教育・研究に携わり十二年間、本学に在籍してきました。さらに、今年度からは講師として、立命館大学の一員に加えていただくことになりました。

私は、卒業研究から学位論文まで、溝尻勲教授のご指導のもと、画像計測・動画処理・信号処理の研究に従事してきました。とりわけ、私は医用超音波画像に関するテーマを研究の題材に選んできました。私がこのテーマを選んだ理由として、工学と医学の異なる二つの分野がどのように結びついているのか、また、医学の分野の中に工学がどのように生かされているかということに興味を持ち、この研究を行いました。この研究テーマのキーワードとなる超音波は「いるか」が発しているの知られているように、音波を出し、その反射波によって観測対象となる物がどれくらい離れたところにあるか、また、どれくらいのおおきさのものか、あるいはどれくらいの硬さをしていのか等を知ることが出来ます。この超音波を使った装置として魚群探知機や地下埋設物探査装置等があり、現在では理美容にも使われています。このように超音波を用いた計測技術はいたるところで用いられているのですが、この計測方法は送信した波が対象物体に当たることによって生じる反射波の強弱、あるいは位相差によって対象物体の有無等を計測する方法であり、この波の強弱や位相差の信号を色に変える

ことにより、我々が一見してわかる画像信号に変えることが出来ます。しかし、この信号を我々が見れば何が映っているのか、あるいは、対象となる物体がどこにあるかがわかって、各種装置が反射波から対象物体の抽出等を行うとなると、我々が見て認識できるほど容易に行うことはできず、何らかの情報を与えなければなりません。私の研究は、このように入手された超音波信号の反射波から、関心領域がどのような形状をしているのか、あるいは連続するフレーム間においてどのような変化をしているのかを自動的に抽出できるシステムの構築を行っています。今後は、この医用超音波画像を用いた信号処理をベースに、様々な医用画像やその他の画像へと研究分野を広げていきたいと考えています。

さて、最後になりましたが、全国から注目されている立命館大学の一員に加われたことで微力ながらも教育・研究の発展に携わらせていただき、喜びと責任感を感じながら充実した日々を送っています。本学での教育・研究に携わると共に自己を研鑽し、日々精進してまいりますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願ひいたします。

思い出の「電気工学実験」

山田 光

(昭和四十四年学部卒)

アプロ十一号が人類初の月面着陸を成し遂げた昭和四十四年の数年前私は衣笠校舎四号館で電気工学実験を受けている時代でした。理工学部ですから、強電実験も弱電実験もあります。強電実験指導書(実験書)の扉には「実験室は学生の研究道場である」「自らの手で実験し、傍観者として終わる事なかれ」「実験は真剣勝負の思を以て行え」等々の訓言が並んでいます。メーター類は実験装置の傍には無く、広い実験室の端に諸種類、諸定格のメーターが整頓されいっばい並んでいます。そこから適切なものを探して持って来て実験装置の傍にある木枠の台にはめ込んで配線するのです。「先生、ここ(回路図上の)へはどのメーターを使うのですか?」などと質問したら、えらいことになりました。はじめはまったく配線してありません。単芯ビニール被覆の導線、しかもクネクネに使いくたびれたものを手でキュット引き伸ばしただけの束をいただけるだけです。自分たちが選んで持ってきて

たメーターはこれで適切だろうか? 配線はしたものの間違っていないだろうか? の不安でいっばいの火入れ直前状態でありました。この時点でメーターの選択から配線のすべてに関し先生の厳しいチェックを受けました。そして漸く安心してスイッチオン出来るのです。ですから時間のかかること、かかること。たしか午後一時から始まって、六時、七時は常で、遅い班は九時、十時までやったという話も聞いています。もちろん先生方も最大限のご忍耐であられたと思います。弱電実験も実験指導書は目的・原理、回路図等は超簡潔に書かれていて、実験手順は自分たちで考えねばなりません。データがとれて、グラフも描けたが、これで良いのか不安でいっばいのもまま計器室の先生のところへ班でまともに行き、検閲を受けます。たいてい「ダメ!」です。さあこのときです。「どこがダメなんでしょうか?」などと、質問したら、これまた大変なことになります。まあ大変なことにはなりません

「自分たちで考えるのが実験です。」とお答えになったと記憶します。班の中には、どこから手に入れたのか「これで通った」というデータおよびグラフを持参しているやつ(いや友)がいて、実験を早く終わるためのうまい一手とは思いますが、それを参考にするどころか丸写しにしてデータおよびグラフを捏造して持って行っても、不思議に「ダメです!」になりました。弱電実験も又、班によっては膨大な時間を費やし、先生方に対しご忍耐を強要していたと思います。

けれども、つらい苦しいことばかりではありませんでした。実験を早く終るために、あわよくば実験を楽しむために、われわれの幾人かは、マイニッパ、マイラジペン、マイ計算尺、マイテスターを持参して実験に臨みました。中でもマイテスターの活躍は、配線を確実にし、実験データ取得をたいへん速めてくれました。まさしく「電気実験数種の神器」と云えるでしょう。「(データやグラフを)まだ持っていくな! 早すぎてもヤバイで!」という意見も出ました。これら実験神器の思い出に加えて、忘れられない事実は、共同実験者だった藤原弘君は自作のオシロスコープをポストンバッグに

入れて実験に来たのです。管面直径五センチ程度のブラウン管を大阪日本橋のジャンク屋で買ってきたと話していたように思います。弱電実験の多くは真空管でしたから、テスターには出来ない動作中の波形をモニターしながら実験できました。「おい! 正弦波の頭クリップしてるで!」「おい! 発信出力信号が歪んでるで!」と藤原君のうるさいこと。でもオシロの威力は絶大でありました。共同実験者を大変感動させてくれました。さらに、我々電気学生は、「強電派」、「弱電派」、「どちらでもない派」にファジーに分類可能でありました。「強電派」はすでに電気エネルギーの発・変・送電技術に情熱を燃やし、「弱電派」は真空管オーディオ技術や無線やアンテナに異常な感心を持っていました。さて、その日の実験テーマが強電であれば「強電派」の一人が、また弱電のときは「弱電派」の一人が「おまえらさわるな今日は俺がやる!」とリーダーシップ宣言を發します。その日の実験の速いこと。そのあとはたいいていラーメンとビリヤードでした。行過ぎたリーダーシップとは思いますが、見ているものもずいぶん勉強になりました。さて、私は、三十四年間、広島

国際学院大学(旧、広島電機大学)にて電気磁気学、電子回路、電気計測ほかを講義、前半約十五年程は電子工学実験も担当しました。本年平成十七年三月定年前退職と同時に、四月から立命館大学理工学部で電気電子工学科・電子情報工学科の実験指導非常勤の一人をさせていただいております。現在、前期の全実験を終了したところですが、この前期で感じたことの最大事は、私が学生時代に受けた実験指導のスタイルが、四十年という時代の変遷とともに、「より高い教育効果を産むスタイルに進化していた。」ということですが、言いかえますと、私は電気工学実験の「浦島太郎」だったのです。電気工学の基礎理念は変化していませんが、実験時間、時間割、レポート、口頭試問、等々のスタイルが、まるで変化していました。しかし、この新しい、教育効果の大きい方式に追随させていただくために、今年還暦を迎えた老体に鞭打ってがんばって見ましたが、充分追随し切れなかった点も幾つか残してしまいました。この点を反省しつつ、我が身に残るわずかな力を後期の実験指導に全力投資いたします。拙文お許しください。

## 好機に恵まれて

松原 満

(博士後期課程)

私が立命館大学の電気電子工学科に入学して以来早いもので六年が経過します。私が現在席を置く立命館大学博士後期課程へと進学するまでの経緯を、幸運にも与えて頂いたこの機会にお話致します。

先日、現在の私の原点、出発点ともいえる地、山形県へ出向く機会に恵まれました。私が山形県を後にしたのが一九九九年三月です。から六年と五ヶ月ぶりに山形県を訪ねたこととなります。当時私が住んでいたアパート、いきつつけのラーメン屋、そして山形大学。それらは私の記憶よりも若干古びていながらも健在で、久々に訪れた山形の町並みは懐かしさと新鮮な驚きで溢れていました。私が立命館大学に入学したのは一九九九年のことです。そして私が故郷の愛知県の高校を卒業したのは一九九八年。高校卒業後、私は一年間山形大学物質工学科に在籍していました。

私は幼少より物を作ることが大好きでした。発明箱と称したみかん箱は、分解したおもちゃや電化

製品、道端で拾ってきた奇妙な形

の金属片やゴム片等のガラクタで一杯でした。家に帰るといつも発明箱を引っ張り出してきては、あれこれとガラクタを組み合わせて様々な物を作っていました。夜遅くまで仕事に努めていた母に「暗闇でも書けるペン」と銘打って、ペン先が光るペンを自作してプレゼントしたのを覚えています。そのような私にとって、電化製品はまさに魔法の箱でした。ガラス張りの黒い箱からは映像が出力され、黒いビニールテープは自在に音声を出力しました。不思議に思い親に無断で分解してみたものの、工場のジオラマ模型のような板が入っていたりするのみで全く構造が理解できず摩訶不思議に思ったものです。電化製品に魅了された少年はその頃から自然に将来は工学の道に、こと不思議の根源であった電気関係の道に進もうと決めています。

そのような私は、気がつけば山形大学で物質工学を専攻していました。高校の先生の勧めで受験し、

運良く合格した唯一の大学でした。浪人の意志を親に話した際、父親からこう言われました。おまえに投資する金はもはやどこにもない。山形でどこでもいってしまえ、と。電気系へ進みたかった私にとっ

て、その選択に私の意志は皆無でした。友人の口をして「糸の切れた凧」。風の赴くまま意志なく虚空を彷徨う存在。それが私の高校時代を形容するに相応しい語句です。上手くいかない様々な現実から解決の糸口を見出そうとせず、眼を背け、逃げ続けた先が山形だったわけです。自分の意志ではどうにもならない現実が眼前に山積みでした。人恋しさに喉を鳴らす山形大学に住み着く野良猫を膝の上に乗せ、一人夜空を見上げながら「こんな俺に誰がした?」このままでいいのか、俺?」と自問自答を繰り返しました。このままでは自分が駄目になっていく気がしました。変えなくては。自分の力で変えていかなくては。上手くいかぬ現状を自分の力で打破しなければ。自分の力で望む未来を切り開かねば。思い出せ。俺は一体何になりましたか? たったんだ? 俺の望む未来は……? それを機に私の未来に対する挑戦が始まりました。紆余曲折の挙句、立命館大学へ入学が決まった当時の心境を私は忘れ

ることはできません。自分の意志の伴う未来への着実な第一歩。それが立命館大学電気電子工学科への入学でした。

立命館大学の学部時代で得たものは専門知識もさることながら出会ったと思います。学部時代に現在の私を形成するにあたり多大な影響を与えた友人二人に出会いました。二人の尊敬すべき共通点は、自分の力と意志で学費と生活費を捻出していたことです。一人は学問を修め得た奨学金を生活の糧とし、一人は学問とアルバイトを完全に両立させて生計を成していました。彼らの並外れた努力を眼の当たりにし、私は彼らから意志の力とは何たるか、努力とは何たるかを学びました。元来負けず嫌いな私は彼らに触発されて自分なりに努力していくうちに、はっきりと自分の理想を見出すことができ、またその理想に近づける充実した日々を送ることが出来ました。加えて私にとって重要な出会いが、師である杉本末雄先生とその研究室の諸先輩方でした。就職か大学院進学か。進路を決め兼ねていた時期のこの出会いは強烈でした。専門知識を自在に操り解を導くことのできる諸先輩方の存在は私のこれまで描いていた理想をあっさり塗り替えました。もっと専門

性を高めたい。純粹な専門性への興味から杉本研究室の門戸をたたき、良き師、諸先輩方、そして整った環境に恵まれて自分の理想を追い続けた結果、私は現在に至ります。

私の父は高校の一教員でした。そんな父がよく言っていました。状況が許したならば俺は大学院に進学したかった、と。理想を追い求めて生きることが出来る環境がそこにあること。望んだとて叶わぬことが多々ある世の中で私は今、幸運にも立命館大学でそれを手にしています。博士後期課程に進学し改めて私は、この好機を無駄にせぬよう自分の理想に一步ずつ着実に近づいていけるよう努力していく覚悟でいます。そして己の理想に挑戦していった先に待つ未来に私は今、胸高鳴る思いで一杯です。

最後にこのような表現の機会を頂きましてありがとうございます。また学びの機会を与えてくださった杉本末雄先生をはじめ、ご指導、ご支援頂いた諸先生方、先輩、友人、後輩、家族の皆様には今後の自分の活躍をもって感謝の意を表していきたいと思っております。

理工学部  
の  
学科  
変遷  
の  
紹介

理工学部はBKC(びわこ・くさつキャンパス) 移転を契機に、この間、社会的ニーズや技術動向を鑑みながら、目まぐるしい展開を図ってまいりました、これらの展開は、産学連携、外部資金導入、志願者確保の分野で一定の成果を挙げつつあり、学園全体の極めて重要な原動力となっております。

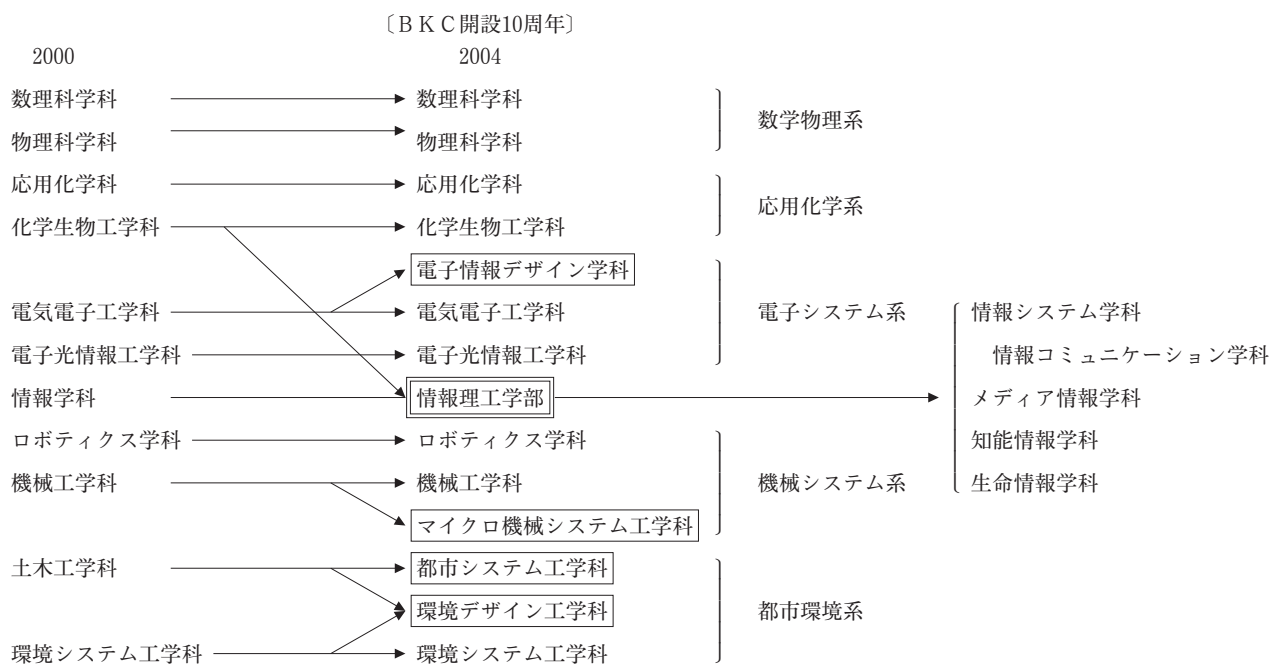
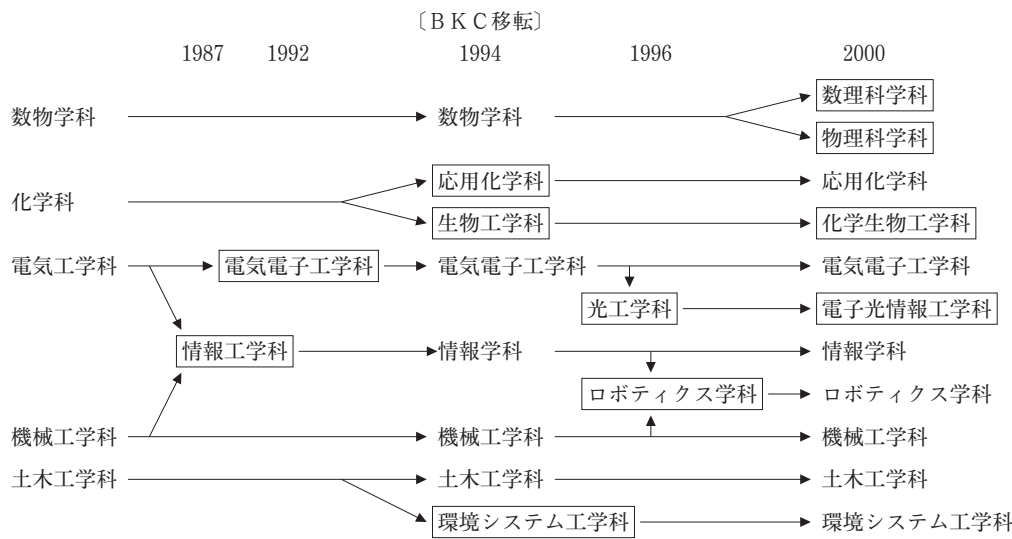
その一方で、「学園行事や様々なメディアを通して理工学部の隆盛を伝え聞か、学部学科の様子が複雑で本当のところよくわからない」といった皆様方の意見をいただくことが多くなりました。

ついでに、立命電友会会報のページをお借りして、BKC移転前から今日に至るまでの学部内の学科変遷を下記通りご紹介させていただくことにいたしました。学部学科に対する皆様方のご理解を賜りましたら幸いです。

今後、学園の社会的有様に連動して、理工学部は更に収斂と展開を行なうものと思われま。しかし、いずれの時においても教育と研究を通じた社会的責務を果たすよう尽力して行く所存です。引き続き、変わらぬご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

- 電子システム系
- 電気電子工学科
- 電子光情報工学科
- 電子情報デザイン学科

近年の理工学部の学科変遷



同窓会だより

浦山研OB会

去る六月四日浦山研究室OB会を京都駅近くのハトヤ瑞鳳閣で行いました。浦山先生が来年古希を迎えられる前祝いの名目での集いでした。前回の退官慰労会から四年振りの開催になりました。

現在の浦山研究室のOB会は、一昨年から辻村・前田研究室同窓会と合同で一つのOB会を結成しています。今回のみ単独のOB会として臨時に企画したもので、前途の合同研究室同窓会となるに至った経緯の説明および今後の運営等についての確認を行いました。

当日は、話が急であったにも関わらず多くの方の参加が得られ、また前田先生にも参加して頂き、季節外れのちゃんこ鍋を囲みました。各テーブルでは久しぶりに会う者、見覚えはあるけども……といった者どうしが、このOB会の繋がりによって酒を酌み交わし、世代を超えた会話で盛り上がる事が出来ました。タイムスリップしたかの様に衣笠やBK Cの思い出話に花を咲かせ、時が経つのも忘れるほど、楽しく過ごしました。これからも、このOB会の繋がりを大切にしていきたいと、会員の皆さんの御協力をお願い致します。

幹事一同



「立電三〇会」

卒業五十周年記念祝賀会を開催しました

人生百歳の折返し点を過ぎた私は立命の学舎を巣立って満五十年を迎えたのを記念してご同伴での祝賀会、観劇会を開催しました。辻村寛先生のご出席もお願いし参加者は二十四名となり五十年ぶりの再会のメンバーも居られ久しぶりの再会に同志は感激していました。

四月四日待遠しかった開花の始まった円山公園の桜花を見ながら散策して、八坂神社常盤新殿(式場)に於いて祝賀会豪華な昼食を共にしながら苦楽を共にした青春の想いを巡らしながら近況を交換し合い未だ経験したことのない少子高齢化時代を迎えた日本の今日この頃のこと政治経済社会も何んとかく心もとな先行き不安なことが起きて居りこれは何とかしなければとの想いを語り合いながら私達

のこれから先の人生八十、九十歳を身心共に健康で元気で生抜く為の秘訣等話が弾んでいました。

パートIIとして丁度四月は伝統の「都おどり」が甲部歌舞練場で開催されますので観賞を企画し多数の方が久しぶりに豪華な衣装に身を包んだ舞子の芸を見てリフレッシュされるひと時でした。情報化時代の今日便利な情報機器を活用して人と人とのつながりをより大切にし気楽に生きることが大事かと思えます。この五十周年記念節目の会に欠席された人達に対し次回はお出陣してもらおう為の活動を皆んなでアタックし又の再会を確認し合いました。

連絡先 (昭和三十年卒) 岡本 一郎



紫山会 (昭和四十三年卒)

我が同窓会紫山会は、四方を山紫水明な山々に囲まれた京都の母校電気工学科を昭和四十二年(四……

紫、三……山)に卒業したことに因んで命名されました。今年はその名前に違わず、皐月ツツジが咲き乱れ、風薫る東山の麓に位置する、名庭と京料理の「洛翠」に、五月二十九日の日曜日、五名の先生方と十五名の同窓生校友が集いました。

学問だけでなく人生の先達である元氣満々の先生方の、恒例となった近況を交えた身近なお話や、大学の発展振りを伺いましたが、今年度は、人生の大きな節目である定年を迎え、還暦となる方も多く例年とは少し雰囲気違った会となりました。さながら、同窓生の電気科卒業から今日までの人生の総括報告会のような趣となりました。自ら会社を創業し更に株式市場を目指されている方、家庭の事情から家業を受継がれた方、ビジネス・パーソンとして夫々の会社で開発・営業にと励まれた方、公務員として社会に尽くされた方など、その時々々の社会状況に採られながらも、懸命に乗り越えられて来たお話を一人一人から、爽やかに明るく語り合いました。同窓生一同の連帯を一層深め、これからの力となる一日となりました。

会場となった「洛翠」の庭園は、立命館大学に所縁のある、校友会報でも紹介された造園「植治」小川治兵衛の九代目の作によるものです。理工学部が大きく飛躍発展

を遂げている琵琶湖からの疎水を、琵琶湖に模した庭の池に直接引き入れていた回遊式の名庭園となっております。立命館の伝統を思わずには居られません。池田さん、鎌倉さんをはじめとする世話役の方々の、趣向を凝らしたアイデアに感心すると同時に、毎年の事ながら参加者一同、ご苦勞に感謝しました。

紫山会の今後の盛会と再会を約束して、庭園をバックに今年の記念写真を撮りました。(谷口 記)



ななまる電友会

(一九七〇年、昭和四十五年卒)

六月十八日(土) 十八時より、JR京都駅前のさと茂旅館において同窓会を開催しました。

会には卒業時の先生方の中でただ一人現役の先生として大学に対して変わる事なく、情熱を持ち続けておられます中西先生にご参加

をお願いし、全員で二十名の楽しい集いとなりました。

最初に先生から大学の近況等の報告をしていただき、乾杯へ移り会はスタートしました。酒と楽しい思い出話に会はどんどん盛り上がり各自の近況を報告にて、より出席者が一体感を感じているようでした。

卒業の前年は学園紛争にて後期の試験はレポートに切り替えられ卒業式は行われず、卒業の七〇年は千里万博が開催され、そのアメリカ館には月から持ち帰った石が展示され、大変な話題になり、良い意味でも悪い意味でも日本が大きく動いた激動の時代でした。そのような時代を共有する同期生ですので、思い出話は尽きない様子でした。

しかし旅館の都合もあり、二十一時過ぎには校歌を歌ってとりあえず中締め、その後は宿泊の部屋で二次会、ようやく午前一時くらいに終了しました。

しかし翌朝聞いた所によりまずと、それでも満足できず、それから外に出て朝帰りのメンバーもい



たとか、強者はまだ健在のようでした。

そんな楽しい集いでしたので次回を二〇〇七年六月の第三土曜日に開催する事として、再会を約束し朝食の後、会を終了しました。

石井英敏 記



「電四六」

七月九日(土)に四十六年卒の同窓会を開催しました。

一昨年度より三十数年ぶりに同窓会を開催し今年で三回目です。

昨年、私どもの会の名称を「電四六」(呼び方:でんしろう)と命名し同窓会活動をより活発に推進しております。

今回は雨にもかかわらず十五名の参加を得る事ができ、三回目となると会の雰囲気も懐かしさから「どないですか」とお互い呼び合おうようになり、盛大に親睦を交わしております。理工学部がびわこ・くさつキャンパスに移転し十年が経過するのに訪れる機会がな



いとこのことで懇親会の前にキャンパス訪問、お忙しい中、川畑良尚先生に電気電子工学科の実験室、研究室を案内していただきました。

若かりし時に配線をして実験をした時のことが懐かしく、また先生と研究生からはパソコンで制御駆動したモータの説明を受け大変有意義な時間を過ごしました。

懇親会は京都駅前「さと茂旅館」で行い今回初めての参加者もあり各自から自己紹介や近況報告を行い、和やかな雰囲気の中で遅くまで楽しく語らい皆さん非常に元気でした。これからもさらに多くの方の参加を願ひ、毎年実施していく予定です。

これまでの同窓会で約五十名と連絡が取れ今後「でんしろう」の輪を広げより多くの方と親睦を図りたいと考えています。まだ連絡をいただいていない方はこの機会に是非連絡をしてください。また次回お待ちしております。

幹事 荻田泰廣

「住所変更」掲載の一時中止について

会長 荒木 敏

予てより、事務局あてにご通知をいただきました連絡先変更の情報は、会報の「住所変更」の欄を通して逐次会員皆様方にご紹介してまいりました。その主旨は、立命電友会が「年次同窓会の活動と会員の相互交流」を根幹としており、それらを唯一の目的とした名簿整理とその広報は極めて重要で必要不可欠な事柄であるとの認識に基づいております。

しかし今年四月より個人情報保護法が施行され、本会会員情報につきましても法に触れないようにあらゆる事柄を想定しながら、これまで以上に慎重に取扱わなければならなくなりました。その詳細につきましては今後役員会において、法の遵守と同窓会活動を両立できるように議論を積み重ねてゆく所存であります。つきましては、これらの検討を行なう期間、暫定緊急措置として「住所変更」の会報への掲載を一時中止させていただきます。ご存じのことにお知らせ申し上げます。主旨ご理解のほどよろしくお願ひ申し上げます。

なお、今般の「法の施行」のよってのみ立命電友会という任意団体の自主・自由活動が阻害を受ける様なことがあってはいけません。従って、年度ごとの名簿などについてのお問い合わせは、従来通り事務局にて承りますので随時ご連絡ください。

計報

卒年	氏名	生年
昭5年	小野 楠曠	平成17年3月21日
昭14年	落合 幸民	平成17年1月26日
昭17年	田辺 秀夫	平成17年1月8日
昭20年	桑原 重夫	平成15年
昭22年	間島 健	平成16年12月末
昭24年	佐々木剛三	平成16年5月
昭30年	青木 史郎	平成16年6月18日
昭31年	小原 貞一	平成14年
昭32年	黒川 佳英	平成10年
昭33年	山本 忠男	平成16年6月26日
昭35年	上平 恵司	平成17年6月28日
昭39年	西田 健	平成16年5月
昭48年	池平 哲男	平成15年6月26日
昭55年	伊藤 康裕	
平8年	奥村 純也	

事務局便り

立命電友会会報二十六号の発行にあたり、ご寄稿いただきました皆様方には、心より御礼申し上げます。同窓会の開催など本会に関わりの有りますこと、随時ご寄稿賜りますようお願い致します。住所変更等の変更がございましたらご連絡のほど宜しくお願いします。皆様方から届いた住所変更は校友課・卒研担当教員に連絡させていただきます。

立命電友会連絡先

〒525-1857

滋賀県草津市野路東一―

立命館大学理工学部電子システム系内

立命電友会事務局 川畑 良尚

電話 〇七七(五六)二六六二

FAX 〇七七(五六)二六六三

E-mail: denyukai@ml.ritsumei.ac.jp

http://www.ritsumei.ac.jp/se/re/denyukai/

(会報の題字は久保之俊氏)